研究区分	教員特別研究推進　教育推進

研　究 テーマ	大学体育における運動不得手学生のテニス技術を向上させる心理教育指導の試み				
研究組織	代　表　者	所属・職名	薬学部・准教授	氏名	窪田　辰政
	研究分担者	所属・職名	静岡県立大学・学生	氏名	近藤　七海
		所属・職名	薬学部・非常勤講師	氏名	大石　哲夫
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発　表　者	所属・職名	薬学部・准教授	氏名	窪田　辰政

講演題目

大学体育における運動不得手学生のテニス技術を向上させる心理教育指導の試み

研究の目的、成果及び今後の展望

【目的】

本研究では、大学体育教育における新しい教育方法の提案を試みることを目的とする。今回は、大学体育、特にテニスの授業において介入授業を行い、学生の自己効力感を育むことで、テニス技術に対する自信度や技術そのものの向上に影響を与えるかを検討する。

【対象および方法】

12名の大学生（男子4名、女子8名；有効回答率100%；平均年齢19.6歳）を対象に介入授業を行い、介入前後にテニスそのものやボレーボレーなどの技術に対する主観的自信度や、各技術のペアラリー数を測定した。ここでは自己効力理論に基づいて、受講生が失敗を恐れずに積極的に技能習得に取り組めるような安全な環境づくり（一緒に授業を作ってゆく立場となる・自他の心身の安全が保たれる学習環境の形成に努める・仲間の技能が向上した点や努力が感じられる点を素直に称える等）を意識し、通常クラス以上に時間をかけ、個々の学生の挑戦を支える授業の環境づくりに努めた。また、介入授業後に授業評価アンケートを行い回答を求めた。受講生は全員テニス初級者であった。介入期間は2018年4月上旬から7月下旬にかけて15回行われた。倫理的配慮としては、対象となる学生に対して研究に関する趣旨を口頭で説明し、個別に作成した授業評価アンケートの提出をもって同意したものとみなした。分析方法は、介入授業実施前後の比較には、Wilcoxonの符号付き順位検定を行った。

【結果および結論】

介入授業の結果、すべての尺度において主観的自信度の向上が見られ、また各技術のペアラリー数においても有意な結果が得られた。さらに、授業を通じて情緒的な安定をもたらす友人が約5名増加したことに加えて、本授業が大多数の学生のストレス軽減や、対人コミュニケーション能力の向上に役立つことも示された。これらのことから、自己効力理論に基づく心理的サポートを取り入れた大学体育教育が、学生の自己効力感を向上させ、そのことにより技術の向上だけでなく、友人数の増加やストレス軽減、対人コミュニケーション能力の向上にも影響を与えることが明らかになった。

今後はサンプル数を増やしより正確なデータを入手するとともに、統制群を設定しその教育効果を比較検討することが望まれる。